

【高松法務局長賞】

言葉の違いを乗り越えて

さぬき市立長尾中学校 二年 石川ひかり

私の家は農家だ。ミニトマトやタマネギ、ブロッコリー、キャベツ、オクラなどを作っていて、両親、祖父母と一緒に、ラオス、カンボジアから来た九人の研修生が、毎日一生懸命働いている。家と仕事場が近いので、私も登下校の時、「いつてきます。」「いつてらっしゃい。」「ただいま。」「おかえり。」と、あいさつを交わしている。それだけではなく、学校での出来事を話すこともある。「もう少しで運動会があって、今日学校で練習したよ。」「運動会ってどんなことをするの?」「みんなで踊ったり走って競争したりするよ。」「私の国でも似たような踊る行事があるよ。それに歌うこともあるよ。」「少し日本と違っているね。でも楽しそう。」「このように、中学生の私とも毎日明るく話してくれる。

しかし、彼らは日本語で自由に話せるわけではないし、日本語の話を全て聞き取れるわけでもない。また、私たちも彼らの言葉を話せないし、聞き取れない。家族のように生活しているけれど、私たちの間にはいつも言葉の違いという高い壁がある。

小学校五年生の時、新しくラオスの女性が働きに来た。他の人と比べて、まだ日本に慣れていないということもあり、話しかけにくかった。けれど、どんな人なんだろうと気になった私は彼女に話しかけた。「初めまして。私の名前は石川ひかりです。日本での生活はどうですか?」と。しかし、返事はない。目は合っているはずだから、気付いていないということはないと思う。ということは、私の声が小さくて聞き取れなかったのだろうか。そう思った私は、ゆっくり大きな声でもう一度話しかけた。しばらくして彼女は、「ごめんなさい。分からない

い。」と小さな声で言った。それはそうだ。私だって、外国へ行って急に現地の人に話しかけられたら、戸惑ってしまうだろうし、会話なんてできるわけがない。日本に来る前に、彼女らは少し日本語を勉強して来るらしいが、いざ知らない現地の人と話すとなれば難しいだろう。私は彼女を嫌な気持ちにさせてしまったと思い、「ごめんなさい。まだ日本語難しいですよ。」と言った。すると、彼女はとでもつらそうで、悲しそうな顔をしていた。謝ったことが伝わっていないのだろうか、それとも日本語が分からなかったことが悲しかったのだろうか、あるいはその両方なのか。そのときの彼女の顔は、今でもはっきり覚えている。

次の日、彼女が私に話しかけてきた。「日本語を教えてほしい。」と。私は驚いた。驚いたと同時に、私が教えられるのかという不安でいっぱいになった。けれど、昨日の自分の言動が理由で話しかけてきてくれたというのなら断れないし、彼女と話してみたい気持ちもある。だから、私は彼女に日本語を教えることにした。「指さし会話帳」という本やスマートフォンでの翻訳機能を使ったり、あるいはジェスチャーやイラストを使ったりして教えた。どのように伝えれば彼女が理解できるかを考えて話すのは大変だった分、なかなか伝わらなかったことが伝わったときは達成感があった。そして、教える側の私も彼女の話すラオス語を理解しないといけないことに気付き、私もラオス語を教えてもらった。大変なときもあったが、上達するにつれて楽しそうな笑顔をする彼女を見ると、私もうれしかった。以前は全く分からなかった彼女の話すラオス語が分かるようになったことにより、彼女自身のこととも以前より分かるようになった。五人兄弟の長女だということ、もう少しで誕生日だということ、そしてすごく優しい性格だということ。たった二・三ヶ月、お互いに時間があるときだけお互いの言葉を教え合った結果、こんなにも仲良くなれるなんて。その後、彼女から

手紙をもらった。たった三文だけの手紙ではあったが、私は大きく心を動かされた。

「がいこくから きたからと 行って、なにも できない わけじゃない。でも、たくさんの ひとの ちからが ひつよう。たすけ あう ことで ひとびとは せいちょうできる ことを した。」

相手の言葉を理解しようとすることは、相手を本当に理解しようとするのだ。今回、私たちが言葉の違いという高い壁を乗り越えられたのは、互いが互いのことを理解しようとしたからだろう。自分とは違った人、自分にはない個性をもっている人など、たくさんの人と関わり合って生活しているからこそ、私たちは日々成長していけるといふことを実感した。これから出会うたくさんの人たちとの間にも、たくさんの壁があるかもしれない。でも私は、その壁を乗り越える喜びを知っている。相手を本当に理解しようという気持ちを、今後も大切にもち続けたい。